

## 第21回三汀賞優秀賞受賞

令和2年度第21回三汀賞に本校3年高平碧夢<sup>たかひらみゆ</sup>さんの俳句作品が、中学生の部で優秀賞を受賞しました。今年度は全国から17,221句の応募がありました。各入賞作品は、こおりやま文学の森資料館に展示されることになります。(2/6 福島民報掲載)

### 優秀賞「菜の花や小さな君のスニーカー」

～作品に込めた思い～

家族で菜の花畑に行った時のことです。幼い妹が走っていた姿を思い出し、色鮮やかな菜の花と妹の姿が愛らしく思えたことを俳句にしました。



<俳句について> 俳句は、五・七・五の十七音で表現されます。このように短い詩は世界でも珍しく、“世界一短い詩”とも言われます。俳句には、五・七・五の十七音という決まりの他に、句の中に季語をひとつ入れるという決まりがあります。

<三汀賞について> 「三汀賞」は、久米正雄の俳号「三汀」にちなみ広く俳句を募集するもので、久米三汀自身を顕彰するとともに、その俳句に対する情熱の継承を目的として設定したものです。

久米正雄。小説家、劇作家。明治24年11月23日、長野県小県(ちいさがた)郡上田町(現上田市)に生まれる。幼時に父を失い、母方の里、福島県安積(あさか)郡桑野村(現郡山(こおりやま)市)に移住。東京帝国大学英文科卒業(東京大学)。在学中から創作に関心を示し、第三、四次『新思潮』の主要な書き手として、戯曲『牛乳屋の兄弟』『阿武隈(あぶくま)心中』、小説『手品師』『競漕(きょうそう)』などを発表、注目された。人気作家となった久米は、以後自ら文壇の社交家をもって認め、通俗小説の面にも新たな活路をみいだしていった。通俗小説の代表作に『沈丁花(じんちょうげ)』(1933)その他がある。俳号を三汀(さんてい)といい、俳人としても知られる。昭和27年3月1日没。

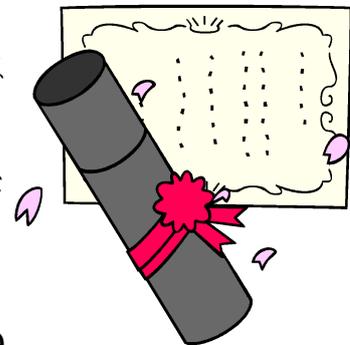
～ねがい～

「涙について」

本から学ぶ事③

朱川湊人「かたみの歌」より

3月卒業シーズンになるとお世話になった友人や先輩・後輩、先生方との様々な別れがあります。そこには、個々に寂しさと思いが、涙とともにあふれかえってくる光景が見られるものです。人によっては卒業シーズン以外で、様々な悲しい出来事により、涙を流す人もいるでしょう。朱川湊人氏の「かたみの歌：おんなごころ」の中で、涙について書かれている一節を紹介します。



悲しいことがあれば、いくらでも泣けばいい。

けれど実際、過ぎた涙は何の役にも立たない。

涙は、その味を噛みしめて立ち上がるためのものだ。

～皆さんはどう考えますか～

# 石神中学校を支える教職員を紹介します①

学力向上教員(数学科) ながみね ちひろ 長峰 千尋 先生

<簡単な自己紹介>

趣味は、ドライブと引越し。高校までは実家で家族と暮らし、高校卒業してからは1～4年に一度は引越しをしている遊牧民のような人間です。そして、新しい土地でドライブをして、その地の探検を楽しんでいます。



<生徒への期待・願い・アドバイスなど>

夢や目標を持って、日々を過ごしてください。「〇〇になりたい」「将来、こんなことがしてみたい」という夢があれば、それに向かってがんばろうって気持ちになれます。

夢をもつことで、スイッチが入り頑張れる！夢をもつと人は強くなる！

**～勉強する意味を考えよう～** 今から30年以上も前、アフリカのマラウイ共和国に「カムクワンバ」という名前の少年が両親と妹の4人で暮らしていました。この国は、貧しい国で電力普及率が2%しかなく、森林を切り倒して燃料にしていました。これを繰り返すうちに豊富な森林がなくなり、砂漠化したり洪水になったりしました。少年の住む村も、高価な電気を引くことが出来ずに、夜は暗闇の世界でした。また、水をくみ上げるポンプも無く、何時間もかけて水くみに出かけるのは、子どもたちの仕事でした。ある年、この国は大干ばつに見舞われました。国中から食べ物が無くなってしまい、飢えや病気で数千人の人が亡くなりました。少年の一家は、飢饉のため一層貧乏になり、少年は通っていた中学校を辞めなければならなくなりました。しかし、少年は中学校に行けなくても、働きながら図書館で本を借りて勉強を続けました。そして、運命的な本と出会い、「自分で風力発電の仕組みを作って家に電気をとおそう」と決心しました。その日から、少年はゴミ捨て場から廃材を拾い集め、トラクターのファンを外して、風車の羽にしました。そして、アルバイトで稼いだお金で自転車の発電機を買いました。難しい風力発電の仕組みも本を読んで、独学で勉強しました。苦勞のあげく少年は、約3ヶ月で高さ5メートルの風力発電用の風車の建設に成功したのです。それから7年間で5台もの風車を村に設置し、村の人々は電力を得られるようになりました。このことが話題となり、多くの協力者が現れ、少年は念願の中学校に戻って勉強できるようになりました。(実話)

私たちは、なぜ勉強するのでしょうか。あなたは、何を目的に勉強をしていますか。



## 二宮金次郎像あれこれ

二宮金次郎は、少年時代の薪を背負い歩きながら読書する姿が有名です。この姿は1891年(明治24年)刊行の『二宮尊徳翁』(幸田露伴著)に初めて挿絵として掲載されています。1904年(明治37年)以降、修身の国定教科書に、少年期の金次郎(二宮尊徳)が模範的な少年として、数多く登場するようになりました。それは、一生懸命勉強し、家庭の仕事を手伝い、より良い生活をめざす人間としての模範的な姿でした。このことにより昭和に入ってから全国の学校の校庭に少年時代の二宮金次郎像が次々と建てられました。※本校の「二宮金次郎像」2年生昇降口に設置されています。

